

15 韓国における日本古典文学研究の現況

李 愛淑

1. はじめに

2014年1月に韓国政府の教育部は、将来の学齢人口の減少に備えた韓国政府の対応策の一環として「大学構造改革推進計画」を発表した¹。韓国政府案は、2018年度になると、大学入学可能者数と高校卒業生数が逆転すると見込み、大学入学定員を2013年度の56万人から、2023年には40万人へと、三期にかけて、16万人を削減することを骨子にしている。具体的には、2015～2017年度に4万人、2018～2020年度に5万人、2021～2023年度に7万人を削減する計画である。その上、政府の削減の基準のために、「大学構造改革推進評価」を行うと発表し²、政府の評価実施の前に、それぞれの大学が自主的に入学定員の削減策を提出するように促した。

そこで、大学側は自主的に2015年度に4万1943名の入学者を削減する計画を発表して、入試を進めたが、その最終結果を受けた教育部は、今後の資料として「2015年度の全国大学募集単位別入学定員現況」を公開している³。

したがって、同資料の内容を通して、各大学が推進している近未来の大学構造の変化の一面が伺える。すなわち、大学はいわゆる「非人気学科」の入学定員の削減、もしくは廃科、統合などの方法で、入学定員の削減を断行している。非人気学科と指定された分野は、死活問題をいきなり抱え込むことになる。日本学科もそのように指定されたことは、深刻な意味がある。2015年以後の日本語・日本文学・日本学など日本関連学科は、定員削減にとどまらず、廃科などの厳しい状況の到来に対応するように求められている。

教育部の「2015年度の全国大学募集単位別入学定員現況」によると、韓国で日本関連学科（日語日文、日本語、日本学、日本語文化学科など）を設置しているのは86の大学で、前年度の2014年度に比べれば、7の大学で廃科の対象になっ

1 2014年1月29日に発表 (<http://www.moe.go.kr>)。

2 2015年8月31日に「大学構造改革推進評価」結果発表 (<http://www.moe.go.kr>)。

3 2015年10月29日に公開 (<http://www.moe.go.kr>)。

ており、定員削減の対象にもなっている⁴。

このような日本関連学科の危機は、2015年以前から教育現場で察知され、個別大学の事例によって、研究者の間で危惧されている。韓国の大学の未来を考えるには、無視できない重大な問題である。また、教育現場の危機の波は研究領域にまで押し寄せてきている。

本稿は、2005年から2015年までの韓国における日本古典文学の研究、『源氏物語』研究の現況を、実証的に分析し、その中で、教育現場での実態化した危機が個別の研究分野にどのような影響を与えているのかを考察したい。

2. 日本文学研究の概観

まず、韓国における日本文学を含む日本研究の歴史を概観すると、日本研究は韓国社会の日本語教育への需要から始まったと言える。1961年、韓国の大学で日本関連学科が初めて設立されたのは外国語大学の日本語科で、翌1962年には国際大学で日語学科が設立された。このように日本語教育から始まった韓国の日本研究は、1980年代に多くの大学で日語日文学科が作られることで、本格化していくが、その背景には、当時世界第2の経済国である日本に対する韓国社会の高い関心があったからである。日本研究の中心は、日本語と日本文学に関する研究であった。

1990年代に入ると、日本に留学した多くの研究者が帰国し、日本文学の研究は、当時の地域学としての日本学の胎動とも連動し、より多様化・専門化していくと同時に、学会や学術誌、そして研究所なども急増した。

4 教育部の「2013年度・2014年度の全国大学募集単位別入学定員現況」をも参考し、2015年度の特徴を分析したところ以下の3点があげられる。(1) 廃科は地方大学を中心になされている。中源大、金剛大、又松大、東亜大、慶一大、大邱韓医大、光州大は、ソウルや首都圏域以外の大学である。特に、釜山にある東亜大の場合、かなり早い時期から日本語日本文学学科が設立された大学で、釜山の日本研究を牽引してきた大学であるだけに、廃科は衝撃的と言わざるを得ない。学科名称変更に関しては、建陽大の〈中国日本学部〉のように、東アジアを軸に学科を統合し、名称を変更するか、国際学部への統合が一般的であるが、韓南大は既存の日語日文学科とフランス語文学科を統合し、2015年度から日本・フランス語文学科にし、定員削減の募集であった。その統合は恣意的としか言えない。祥明大はソウルと地方キャンパスにそれぞれ日本語教育学科と日本語文学科の二つの学科を同時運営していたが、ソウル所在の日本語教育学科を廃科し、地方キャンパスの日本語文学科に一本化した。まず地方大学を廃科に追い込むのと違い、この廃科は、ソウル所在の各大学の日本語化の今後に及ぼす影響の前兆とも受け取れる。というのは、壇国大の場合、2013年度にソウル所在の日語日文学科を廃科し、地方キャンパスの日本語科だけを存続させる前例があったからである。一つの大学のもつ類似する二つの日本語学科を統合し、存続させた学科に定員をさらに削減している (<http://www.moe.go.kr/>)。

2000年代に入ってから、当時の人文学の危機に対する韓国政府の対応策の象徴である韓国研究財団主導の「人文韓国支援」(Humanities Korea Project)を筆頭として、多様な学術支援政策が取られ、日本研究は数量的に飛躍的な成長を見せた。しかし、大型の学術支援政策は直接的には、1990年代の人文学の危機が原因で、1996年に全国の大学の人文学部長が集合し、韓国政府へ政策支援を求める提言の発表に起因するが⁵、人文学の根本的な環境改善にまでは至らなかった。

日本研究に関しては、政府主導の大型研究支援があったにもかかわらず、2000年代に入ると、大学の日本関連学科はもちろん、日本研究機関の創立も徐々に減少していくことになった。次の表1は、世宗研究所と国際交流基金の報告書がまとめた日本研究機関の創立に関する調査統計で、その数値からも2000年代の環境悪化が確かめられる⁶。

表1 日本研究機関創立日

年代	1950～	1960～	1970～	1980～	1990～	2000～
大学	0	2	13	24	23	5
大学付設研究所	1	0	2	0	5	2
一般研究所	0	1	3	3	0	2
学会	0	0	3	1	9	3

表1の統計から、1980年代、1990年代に活況をみせた大学の日本関連学科の設置や学会創立が、2000年代に入ると、激減していくことが確認できるが、その変化の時期を同じくして、大学の教育現場では日本古典文学が忌避されていった。ただ、それは2004年からの日本大衆文化の全面的開放によって現れた日本現代小説のブームとはいかにも対照的な古典文学の苦戦である。筆者は、2000年代の古典文学の状況を分析し、教育現場での古典文学の苦戦が研究領域にまで波及していることを展望し、古典研究者による韓国語翻訳に対する積極的な評価や、研究スタンスの変化などを提案したことがある⁷。

5 1996年9月26日に、韓国の80の大学の人文大学長が集合し、人文学の危機を救うために、「今日の人文学の危機、我らの提言」を発表した。

6 『2012韓国日本学の現況と課題』(韓国語) 日本国際交流基金・世宗研究所日本研究センター、173頁。この報告書には、日本古典文学、近代文学、日本語、日本学、日本史、日本経済の各領域での2005年から2011年までの研究現況や課題に関する報告がある。

7 李愛淑「ナショナルリズムと古典文学研究——源氏物語を中心に」『日本学報』62集、韓国日本学会、2005年2月。

しかし、2000年代の古典文学の教育現場での苦戦は、2010年代に入ってから、古典文学だけに留まらず、近代文学、日本語教育、日本学まで、すべての日本研究領域にまで押し寄せている。それを端的に表したのが、教育部の「2015年度の全国大学募集単位別入学定員現況」に見える、日本関連学科の廃科と統合である。今後の日本研究の研究環境が厳しくなることが予想され、古典文学の研究領域はさらなる変化が引き起こされるだろう。

では、2005年から2015年までの日本古典文学の研究や『源氏物語』研究の論文の分析を通して、研究の現状を考察し、研究環境の変化に目を向けていく。

3. 分析対象と方法

1990年代に学会や大学付設研究所の創設が集中し、それぞれ競争していく中で、研究者が数多くの論文を発表することがある。本稿は学会のホームページに掲げられた学会の目標や活動を参考に、日本語日本文学の研究を中心とする学会誌を選び出して、その中で研究者同士の交流が最も活発な8つの学会誌を分析の対象にする。また、大学の付設研究所の場合、特定の研究者に偏る傾向があるため、多様な研究者の研究活動を対象にすべく、学会誌に限定した。分析対象の学会誌を、表2にまとめておく。

表2 分析対象学会誌

学会誌名	創刊年度	刊行学会（創立年度）
日本学報	1973	韓国日本学会（1973）
日語日文学研究	1979	韓国日語日文学会（1978）
日語日文学	1991	大韓日語日文学会（1991）
日本語文学	1992	日本語文学会（1992）
日本語文学	1995	韓国日本語文学会（1995）
日本文化学報	1996	韓国日本文化学会（1993）
日本文化研究	1999	東アジア日本学会（1999）
日本言語文化	2002	韓国日本言語文化学会（2001）

分析対象とする学会誌の2005年から2015年までの論文は、各学会のホームページや韓国教育學術情報院（KERIS）（<http://www.riss.kr>）、韓国国会図書館（<http://www.nanet.go.kr>）の資料を参考に調査した。

まず、8つの学会誌が発行した2005年から2015年までの11年間の日本文学関連の研究論文の調査をし、さらに古典文学の研究論文と近現代文学の研究論文に

分けて、それぞれの研究論文の量的推移を、以下の表3にまとめる。上段には古典文学、下段には近現代文学研究論文の数を記し、()の中には日本文学研究における古典文学の研究論文の比率を付記しておく。

表3 日本文学研究論文の量的推移

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
日本文学	19 28	16 39	16 24	9 40	10 25	10 16	13 22	16 21	8 21	17 22	3 16	137 274 (33%)
日語日文学研究	26 33	21 32	16 28	32 38	41 31	23 29	23 27	23 34	29 34	30 25	23 21	287 332 (46%)
(大韓) 日語日文学	11 14	3 11	4 23	7 16	7 13	3 20	2 16	8 18	7 16	12 21	7 26	71 194 (26%)
日本語文学	15 29	9 36	11 27	12 19	6 23	6 21	16 24	7 21	11 23	11 20	10 25	114 268 (29%)
(韓国) 日本語文学	6 22	14 20	15 16	13 6	10 21	10 27	11 13	7 24	8 26	9 35	7 18	110 228 (32%)
日本文化学報	16 14	14 21	11 21	15 21	12 16	11 9	8 15	7 13	7 23	4 15	8 14	113 182 (38%)
日本文化研究	2 34	8 15	5 23	10 20	9 27	7 29	8 20	8 31	6 27	4 26	4 25	71 277 (20%)
日本言語文化	4 10	9 16	7 9	3 7	6 7	8 13	10 20	8 11	5 9	7 16	10 16	77 134 (36%)
総計	99 184 (35%)	94 190 (33%)	85 171 (33%)	101 167 (38%)	101 163 (38%)	78 164 (32%)	91 157 (37%)	84 173 (33%)	81 179 (31%)	94 180 (34%)	72 161 (31%)	980 1889 (34%)

4. 古典文学研究の現況

表3の研究論文の量的推移を分析すると、二つの特徴が見られる。第一の特徴は、古典文学研究が教育現場では敬遠されているにもかかわらず、依然として学会の研究の中心に位置していることである。つまり、11年の間、近現代論文が1889本、古典研究論文が980本掲載されて、日本文学研究論文に占める古典文学の比率は平均34%になる。しかも、2005年から2015年までの11年間、最高38%、最低31%であり、31%を下回ることもなく、安定していることから、古典文学研究の活況が伺える。2000年代からの教育現場での近現代文学の人気や、古典文学の回

避を考えると、平均34%の研究活動は、韓国の古典文学研究の異例の活躍を物語り、教育現場と研究領域との乖離がかえって注目される。

第二の特徴は、雑誌『日語日文学研究』において古典文学が研究の中心となる傾向である。つまり、8つの学会誌のなかで、『日語日文学研究』の場合は、古典文学の研究論文の比率が46%に達している。『日語日文学研究』を刊行する韓国日語日文学会は、『日本学報』を刊行する韓国日本学会と共に、韓国の日本研究の草創期を象徴するものでもある。

このような『日語日文学研究』の古典文学志向は、その創刊号に掲載された論文の構成からしてすでに確認できる。創刊号には次のような論文が掲載されていた。

Ainu 語名詞の形態について

『蜻蛉日記』に現れている自然描写の特質

日本語における否定表現考察

人称代名詞の待遇意識体系研究

平安時代の日記文学概観

人形浄瑠璃と韓国の人形劇

『堤中納言物語』の成立過程について

近代翻訳詩の重訳問題に関する考察

韓日両国語の子音体系の差異と音声教育の問題点

池亭記と方丈記との比較研究

創刊号の10本の論文の中で、文学研究は6本、日本語研究は4本である。そして、6本の文学研究論文の構成は、古典文学研究が4本、比較文学研究論文が2本であった。古典文学論文の比率が67%で、半分を超えている。もし比較文学の論文、「人形浄瑠璃と韓国の人形劇」を広範囲の古典文学研究に入れると、比率は83%に及び、古典文学研究の圧倒的な比率が確かめられる。このような創刊号からの古典文学研究中心の『日語日文学研究』の志向は、2015年までの46%の比率にまで続いている。

以上、学会誌の論文の量的推移の分析を通して、韓国における古典文学中心の研究志向、古典文学研究の安定した高い位相を確かめてきた。教育現場の苦戦と乖離した研究領域の活況の内実に迫るために、以下では『源氏物語』研究の現況を分析する。

5.『源氏物語』研究現況

まず、8つの学術誌に掲載された古典研究論文における『源氏物語』研究論文の比重を調べるために、古典文学の研究論文と『源氏物語』研究論文の量的推移を調査した。表4では、上段は古典文学論文数、下段の（ ）の中は『源氏物語』の論文数を記し、総計ではその比率を付記しておく。

表4『源氏物語』研究論文の量的推移

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	総計
日本学報	19 (5)	16 (6)	16 (3)	9 (0)	10 (1)	10 (0)	13 (3)	16 (2)	8 (1)	17 (2)	3 (1)	137 (24) 18%
日語日文学研究	26 (1)	21 (2)	16 (3)	32 (10)	41 (14)	23 (9)	23 (5)	23 (4)	29 (4)	30 (5)	23 (3)	287 (60) 21%
日語日文学	11 (0)	3 (0)	4 (0)	7 (0)	7 (0)	3 (1)	2 (1)	8 (2)	5 (0)	7 (0)	10 (1)	71 (5) 7%
日本語文学	15 (1)	9 (0)	11 (0)	12 (3)	6 (0)	6 (1)	16 (1)	7 (1)	11 (2)	11 (2)	10 (1)	114 (12) 11%
日本語文学	6 (0)	14 (0)	15 (1)	13 (1)	10 (1)	10 (0)	11 (0)	7 (3)	8 (0)	9 (0)	7 (0)	110 (6) 5%
日本文化学報	16 (1)	14 (3)	11 (2)	15 (5)	12 (2)	11 (2)	8 (1)	7 (0)	7 (1)	4 (1)	8 (1)	113 (19) 17%
日本文化研究	2 (0)	8 (1)	5 (1)	10 (6)	9 (4)	7 (1)	8 (0)	8 (3)	6 (1)	4 (1)	4 (1)	71 (19) 27%
日本言語文化	4 (1)	9 (0)	7 (2)	3 (0)	6 (1)	8 (2)	10 (0)	8 (2)	5 (1)	7 (3)	10 (2)	77 (14) 18%
総計	99 (9) 9%	94 (12) 13%	85 (12) 14%	101 (25) 25%	101 (23) 23%	78 (16) 20%	91 (11) 12%	84 (17) 20%	81 (10) 12%	94 (14) 15%	72 (10) 14%	980 (159) 16%

表4の量的推移の分析から次の特徴が見えてくる。まず注目される第一の特徴は、『源氏物語』研究論文の比重が2005年から2015年までの11年間、平均16%に達していることである。韓国における日本古典文学の研究が古代、中古、中世、近世と時代別に細分化されていることから考えると、平均16%という比率は一つの作品に関する研究論文数としてはかなり高く、古典文学研究における『源氏物語』研究の位相の高さが分かる。

第二の特徴は、平均10%台の論文数が2008年には25%、2009年には23%へと急増していることである。特に、『日本文化研究』の場合は、2008年には古典論文10本中の6本、2009年には9本中の4本の掲載で、2年間に総論文数71本中の10本が集中している。『日本文化研究』が古典文学研究論文の総数では20%を占め、学会平均34%（総数71本中19本）を下回り、8つの学会誌で一番低いことから考えると、『源氏物語』研究論文の平均27%は異例である。2008年と2009年の論文急増の原因から第三の特徴がみえてくる。

2008年と2009年度の論文の急増は、韓国内の博士学位論文の作成と深く関わっている。すなわち、第三の特徴は、韓国内の博士学位論文の準備過程において、学会誌での活動が活発に行われ、論文数が急増したことにある。

例えば、『日本文化研究』の場合、平均27%という高い比率は一人の著者、金サンウンの掲載論文数によるものであるが、同氏はその2年間の学会誌論文の総数10本中の5本、半分を占めている。圧倒的な比重であり、また、論文の題名を調べると、

2008年1月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——桐壺と帚木を中心に」

2008年4月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——空蟬、夕顔、末摘花を中心に」

2008年10月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——紅葉賀、花宴、葵を中心に」

2009年1月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——須磨を中心に」

2009年4月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——澁標を中心に」

上記のように、『源氏物語』と谷崎潤一郎の小説を比較する中で、『源氏物語』の巻別の考察を積み重ねていくことが注目される。同氏の研究活動を追跡したところ、同氏は2007年2月に『日本文化学報』に、「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較——宇治十帖と『鍵』『瘋癲老人日記』を」発表している。したがって、3年間という期間や論文の題名の一貫性に注目し、博士学位申請論文を調査したところ、同氏は2010年に「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較研究」で東国大学院から博士学位を取得したことが確認された。同氏は博士学位取得までの2007年、2008年、2009年の3年間、集中的に研究活動を行ったため、学会誌論文が急増した。

さらに、2008年と2009年度の論文の急増と『源氏物語』研究の博士学位申請論文の関連性を明確にするため、2005年から2015年までの博士学位申請論文を調べ、その間の学会誌論文の量的推移と比較してみる。次の表5は『源氏物語』研究の博士学位論文と学会誌掲載論文の量的推移をまとめたものである。()の中には、博士学位取得者の論文数を記しておく。

表5 学位論文と学会論文の量的推移

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
博論	-	-	1	-	2	4	3	-	-	-	-
学会誌	9	12	12	25 (10)	23 (7)	16 (9)	11	17	10	14	10

2007年まで、12本だった学会誌の論文が2008年に25本、2009年に23本と、ほぼ2倍もの増加をみせるが、通常博士課程在籍の3年間を考慮すると、韓国内で『源氏物語』研究で提出された博士学位申請論文は2009年に2本、2010年に4本、2011年に3本と、この3年間に集中していることも確認できる。取得者9人と論文題名、授与大学を以下に記す。

1) 2009年度

- 崔ジンヒ 「平安時代文学作品に表われている恋愛と言語表現」(啓明大学)
 金ヨンスン 「『源氏物語』研究——基礎研究資料の分析と浮舟論を中心に」(新羅大学)

2) 2010年度

- 金サンウン 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説との比較研究」(東国大学)
 金ビョンスク 「『源氏物語』の感覚表現に関する研究」(外国語大学)
 辛ミジン 「『源氏物語』人生儀礼に関する研究」(外国語大学)
 文インスク 「『源氏物語』に表れている光源氏の間人間関係に関する研究——笑いの機能を中心に」(外国語大学)

3) 2011年度

- 辛ウンア 「『源氏物語』の「嫉妬」に関する研究——「妬む女」の人物造形を中心に」(外国語大学)
 李ミリョン 「『源氏物語』の仏教的世界観に関する研究」(外国語大学)

学会誌論文の急増した2008年と2009年の論文数は計48本であるが、2009年の学位取得者二人の学会誌の論文発表は見当たらず、2010年、2011年度の博士学位取得者7人のうちの5人の論文掲載が確認できた。したがって、博士学位取得以前の、学位論文準備の過程での論文という基準をもって、2010年までの論文へと対象を広げ、7人の論文数を調べてみた。2008年は計25本中10本、2009年は計23本中7本、2010年は計16本中9本で、それぞれ40%、30%、57%の高い比重を見せていることがわかった。博士学位準備の過程での活発な研究活動は注目に値する。

結びにかえて

以上、昨今の韓国の大学の教育現場において、日本関連学科が危機に見舞われているなか、日本古典文学の研究、特に『源氏物語』研究の盛況を、論文の量的推移を通して見てきた。2005年から2015年の統計から、教育現場と乖離している古典文学研究、『源氏物語』研究の現況を確かめることができた。しかし『源氏物語』研究の一端を担っている博士学位取得者の活動が、2012年以後、確認できないことに注目したい。なぜなら、博士学位取得後、より活発な研究活動が期待されるにもかかわらず、学会誌の上では活動が断絶したからである。たとえば、2009年度の2人、『日本文化研究』に精力的に論文の発表した金サンウン、『日語日文研究』に3本を掲載した文インスクラ、合わせて4人の場合は、博士学位取得後、研究活動が途絶えている。また、2010年と2011年度の7人は学位取得までの4年間、学会誌に27本の論文を掲載し、36%を占めていたが、学位取得後、研究活動が縮小している。数値からしても、その7人は2011年から2015年まで6本しか論文を掲載しておらず、10%（総数62本）にまで激減した。統計数値の表面と裏面の間隔に目を向けていかなければならない。

数値の裏面にみえる、博士学位取得後の研究活動の断絶や縮小は、研究環境の悪化、教育現場の危機を意味する。社会的教育環境の変化、いわば人文学の危機が『源氏物語』研究の危機を加速化していることに、より敏感にならざるをえない。若手の研究者の研究活動の悪化という、研究環境の変化を重く受けるべきであろう。特に、韓国の『源氏物語』研究者の高齢化とも連動する研究環境の悪化についての分析結果や、これからの研究展望は今後の課題として残しておく。